

批判的メンタリングと米国の青少年向けメンタリング運動の革新に関する考察

A Study on the Critical Mentoring and the Reform of Youth Mentoring Movement in the U.S.

渡辺かよ子 (Kayoko WATANABE)

1. はじめに

本稿は、2010年代後半以降、批判的メンタリングがいかなる革新を米国の青少年向けメンタリング運動にもたらしているのか、研究と実践の往還の視点から明らかにしようとするものである。米国における批判的メンタリングについて、筆者は2020年にその序論的考察¹をまとめている。本稿では、以降顕著となってきた批判的メンタリングが米国の青少年向けメンタリング運動全体に及ぼしている革新を検討したい。

青少年向けメンタリング運動は、参加者個人の倫理観や使命感と共に、主に以下の三つの分野の研究によってその政策妥当性が基礎づけられ、推進されてきた。すなわち、①メンタリングがもたらす効果に関するプログラム評価、②円環的生涯発達支援として機能しているメンタリングに関する理論研究、③高い社会的投資収益率の観点からの政策的妥当性、に関する研究である。青少年向けメンタリング運動は確かに多くの教育的効果をもたらす一方²、メンタリングが本質的に持たざるを得ない、世代継承に際しての「保守性」は超越できるのかという問題は長らく不問に付されてきた。メンタリングは「恵まれない」青少年に現状適応のための処世術の伝授に止まってよいのか、という問いである。

特に2020年の新型コロナウイルスの感染拡大の最中、ジョージ・フロイド事件を契機に今なお根強く実在する人種差別への抗議がBLM (Black Lives Matter) 運動となって全米で拡大した。批判的メンタリングを主導してきた Weiston-Serdan は2020年を「新型コロナウイルスと人種的不正という双子のパンデミックの年」と称し、以下のように述べている。「新型コロナウイルスは、特定の地域コミュニティに不均衡に影響を与え、その理由が何であるのかわかった時、階級と人種の分断があからさまになった。」³

こうした中、批判的メンタリングは、メンタリング運動においてよきメンターとなるための学びという文脈で提起されるようになった。それは、批判理論（批判的教育論、批判的人種理論）に基づき、青少年が住むことを余儀なくされている汚染された環境への適応にとどまらず、環境そのものを浄化するために、青少年をとりまく文脈を批判的に理解することを主張している⁴。以下、批判的メンタリングがいかに米国の青少年向けメンタリング運動に包摂され、その新たな進化を促進しているのか検討していきたい。

2. 批判意識とその発達

批判的メンタリングの推進者である Weiston-Serdan は、批判意識について以下のように述

べている。『批判意識』という言葉は個人（この場合は青少年）が社会状況を批判的に理解し、自らがそうした状況を変えることができる権限があることを体感し、青少年自らを取り巻く世界を改善するための行動を起こすことのできる能力、を意味する。このことは（例えば、青少年の学校や地域コミュニティの問題といった）小規模な直接的には個人的な問題や、（例えば、地域的なあるいは全国的な運動への参加といった）大規模な問題についてもいえる。批判意識の発達は、いくつかの段階を経て展開すると考えられている。反省（今日の社会や地域コミュニティの問題について考え、いかに歴史的な文脈がこうした現実を形成しているのかを考えること）、動機（青少年が支援のために何ができるのかを考えはじめる）、行動（直接的に重要な問題を提起するよう働きかけることを含む）、である。批判意識は、自我の多面性と、これらの異なるアイデンティティが彼らを取り巻く世界での経験といかに結びついているのかを理解することを含んでいる。明らかに、メンターのような気遣う大人は、青少年が自身を理解し、彼らを取り巻く歴史を理解し、積極的な変化をもたらす自己主体感（sense of agency）を取得する手立てとなることができる」⁵という。

批判的メンタリングの理論的基礎は、ブラジルの成人識字教育に多大な貢献をなしたフレイレの批判的教育論にある⁶。米国の文脈で精緻化がなされた批判的教育論は、批判意識の発達は主に以下の四つの側面があることを明らかにしている。これらは互いに影響を与えながら、発達していくとされている⁷。

第一は、批判的社会分析（critical social analysis）であり、批判的反省（critical reflection）としても知られている。この側面は、経験に関する意味ある思考や対話に関与する個人や、個人の生活同様、制度や機関との相互作用をどのように行っているのかの様式を含んでいる。学校で教師が人種的なマイクロ・アグレッションを犯し、制度的なレベルでは住宅に関する差別や警察との過度に不均衡な接触等、この反省はしばしば個人間の周辺化される経験がエネルギー源となっている。個人やグループはしばしば反省の一部として批判的質問に関与する。そこでは単に抑圧的制度が促進する支配的な自己正当化につながる虚偽の語りを信じるのではなく、抑圧の歴史的制度的な根源的な原因を理解することが求められている。メンター等はここで決定的に重要な役割を果たすことができる。彼らは青少年が所属している集団と彼らの周囲にあって世界を統制しているシステムの両方について、支配的な語りに挑戦することを支援することができるからである。この作業は、個々のメンターと青少年の組み合わせにあって行われるが、メンターと青少年が確認肯定を提供することができ、失われた眺望を埋める事ができる小集団においてもこれが可能となる特別な力が存在している⁸。

第二は、集団的アイデンティティの確立（collective identification）である。この側面は、個人がある集団に所属し抑圧の経験としてアイデンティティの感覚を構築することに言及している。交差性（intersectionality）がここでは重要な構成概念となる。例えば黒人の青少年が事故による怪我で、自らのアイデンティティを障がい者と見なすようになることもある。集団的アイデンティティの形成は、批判意識の構築にとって極めて重要である。それは、自我と集団のメンバーシップの両方の積極的な感覚を強化することができる。当該集団が社会システム

によって脅かされ、虐待されていると感じる場合、メンバーは行動に向け動機づけられる⁹。

第三は、政治的自己効力感ないしは動機（**political self-efficacy or motivation**）である。批判意識のこの要素において、青少年は反省から行動に移行する。ここでは世の中に出かけ、積極的な良き変化を起こそうという気持ちが構築されていく。変化を起こそうとする動機は、内面あるいは人間関係に焦点化される場合もあれば（例えばマイクロ・アグレッションについて誰かと闘わなければならないと思う気持ちや、社会問題に関するさらなる学習に関与を強化する等）、外部的問題に焦点化される場合もある（例えば、社会活動や地域コミュニティの変革努力に参加したいという願望等）。批判的反省から生み出される不平等の認識は、必ずしも動機や効力感の感覚の増進に繋がらず、周辺化を経験している青少年は、自身の状況を批判的に反省することによって、何らかの敗北した圧倒された感覚を持つかもしれない。政治的効力感の感覚は批判的反省と行動をつなぐものとして機能していないという研究が示しているように、成功するかどうか不確かであっても人は行動を決意するかもしれない。しかしながら、青少年が思索から実際行動に移行していくためには、彼らが違いを生み出すことができ、問題の単なる思索よりも実際の行動をしたいと感じることが必要であることが知られている¹⁰。

第四は、批判的(社会政治的)行動（**critical or sociopolitical action**）である。現実の世界の変化が要求され、抑圧の構造への挑戦がなされる段階にあるため、政治的行動は批判意識の最も重要な側面になっているといわれる。批判的（社会政治的）行動には以下の三つの類型が知られている。①個人的行動（**personal action**、投票や政治家との接触等、個人が自ら行動する方途）、②集団行動（**group action**、学生集団が学校での差別的実践の変革を求める等）、③大衆社会行動（**mass social action**、大規模抗議活動への参加）。その他、今日ではソーシャルメディアを用いた抗議活動等、情報技術の活用により従来の人的接触を前提としない抗議活動も広範に実施されている。思索から行為への移行は複雑で個人間の違いが大きいが、親や友人、メンター等がこの移行を促すことはよく知られている¹¹。

上記に示された多面的な批判意識の発達には、特に有色人種の青少年の心身両面の健康に深い積極的なよき効果を及ぼしていることと関係していることが知られている。Heberle らによる青少年の批判意識に関する広範な研究レビューによれば、青少年の批判意識の発達についてその尺度や各種介入様式の効果測定を含めて多くの研究の蓄積がなされている¹²。青少年の批判意識の発達は、地域コミュニティ活動への積極的関与やキャリア発達（職業期待や達成）、社会的情緒的発達（特に有色人種の青少年のレジリエンスやリーダーシップスキル、精神健康、自己への積極的感覚）、学業達成（成績、入試得点、低い落第率、学業への動機、出席、将来の学業達成への期待）等と関連していることが明らかになっている¹³。

上記の批判意識の発達をもたらす積極的効果以上に、特に有色人種の青少年にとって重要な長期的効果は、積極的な人種的アイデンティティの確立である。批判意識の発達は前向きな気持ちの増進に寄与し、自身の人種に関する内面化された否定的な見方を軽減する。こうしたステレオタイプに対する恐怖の軽減は学業成績と相関し、批判意識は青少年に自らが所属する集団に関する支配的な間違った語りを撃退する「心理学的鎧」と見なされ、「抗議としての達成」

という思考態度を鼓吹する¹⁴。

多くの研究がメンター等の気遣う大人が青少年、特に有色人種の青少年が批判意識を築くのを支援でき、そうすることが現実社会で充満しているネガティブな語りから彼らを守っていることを示している。新たに見出された批判的レンズや変化を起こそうという動機、批判的行動を起こすことは、青少年が個人の達成に向けて努力し、さらに米国社会に固着した差別や抑圧と闘う地域コミュニティでの努力に参加することの両方に自己決定権を与える¹⁵。

メンタリングと青少年の批判意識の発達については、青少年が社会における差別や不公正に気づき、現社会の抑圧体制に挑戦し抗議しようとする場合、青少年はメンターと相談し、メンターが提供する安全な非審判的な環境で批判的反省を深めている¹⁶。メンタリングに際して、メンターは自身の価値観の押し付けは行ってはならず、青少年が自身の解釈と自主的動機によって行動参加の有無を決定できるよう配慮することが求められている。青少年が批判的反省から批判的行動に移行する際、メンターは実際行動の賛否とそれに伴うリスクを慎重に見極めるのに多大な貢献をなしている。総じて、メンターは青少年が批判的反省と問いかけを行い、それを支援された行動につなげるという二つの決定的に重要な課題を負っている¹⁷。

3. 批判的メンタリングのロジック・モデル

MENTOR は批判的メンタリングの実践について、以下のロジック・モデルを提示している。

【表1：批判的メンタリング・プログラムの導入に向けた一般的なロジック・モデル】¹⁸

<必要性(Needs)>

- ・ 青少年とその地域コミュニティが政治思想 (isms) や制度的抑圧の経験
- ・ 制度的問題を提起するのに、メンタリングを用いる
- ・ 青少年のための強いネットワーク
- ・ メンタリングに向けた青少年主導のアプローチ
- ・ 社会的・人種的正義
- ・ 地域コミュニティにおける癒し
- ・ 解放された人間の潜在的可能性
- ・ 経済的モビリティと正義

これは、あなたのプログラムが具体的な必要性和地域コミュニティの状況、もし提供されるなら批判的メンタリングが提起するよう位置づけられている諸条件を明確化する場所である。

<仮説と前提>

- ・ 批判的メンタリングの概念と資源に関する最初の親和性
- ・ メンタリングのサービスから大人主導や白人優越主義の価値を取り除きたいという願い
- ・ このモデル委員会のためのスタッフの賛同、他のリーダーシップの賛同
- ・ 周辺化されたコミュニティや潜在的支援者への奉仕

全てのプログラムのモデルは、プログラムの文脈に関する何らかの仮説と、プログラムのモデ

ルが意図されたように機能するのに必要な「制度状況」に基礎づけられている。

↓

<インプット>（上記の<必要性>と<仮説・前提>から）

- ・ 計画中のサービスにおける青少年や地域コミュニティの声
- ・ 強いプログラムのリーダーシップ（CEO やコーディネーター）
- ・ スタッフの知識と関与
- ・ 我々のミッションを理解している市民ボランティアのメンター
- ・ プログラムの活動や批判的行動の資産となる青少年のスキルと強みの明確化
- ・ 批判的人種理論や青少年の行動主義、交差性等の哲学的原理についての理解
- ・ 批判的対話と行為を特徴づける行動カリキュラムの開発
- ・ 例えば抗議や行事の計画等、我々のプログラムの領域を超える必要の提起や、地域コミュニティにおける批判的行動の支援のための、他のサービス提供者とパートナーシップを組むこと
- ・ 学校や雇用主等のパートナー機関からの承認
- ・ 解放行動を是とする資源からの財政的支援
- ・ 設備や他のインフラストラクチャー
- ・ 介護者の関与

インプットは活動を可能にするツールや資源、アセット、地域コミュニティの関係性である。プログラムが開始し、長期にわたり継続されるよう一緒にまとめられる必要のある全ての物事について、できる限り広く考えるとよい。

↓

<活動(Activities)>

- ・ 青少年と家族をプログラムに歓迎する
- ・ メンターの募集とメンターが青少年と共に過ごすのに相応しいことの検証
- ・ スタッフのための専門的能力開発
- ・ プログラムの年間サイクルに向けたメンターと青少年の準備
- ・ 青少年の目標と挑戦の明確化
- ・ モデルに基いてメンターと青少年を組み合わせる
- ・ 継続的支援と参加者の受入手続き
- ・ メンターと青少年の間の批判的対話と会話
- ・ 批判的動機の形成
- ・ 批判的行動の計画と実施
- ・ 批判的反省
- ・ 介護者の関与に焦点化した活動
- ・ 表出と癒しと共に地域コミュニティのトラウマや挑戦に関する議論
- ・ 業績成果の祝福と称賛

- ・全ての段階におけるプログラムのオペレーションの青少年の支援
- ・プログラムのサイクルの終焉における終了活動
- ・プログラム評価（青少年主導）
- ・修了生へのアウトリーチ

スタッフ、市民ボランティア、青少年、その他の関係者がプログラムを構築し、日々実施する活動から始めること。時間が経って青少年が参加する活動が形をなすようにつれて、これを洗練し、固有の状況に合わせたより具体的な活動を構築することができる。

↓

<アウトプット>

- ・プログラムに受け入れた青少年と市民ボランティアのメンターの数
- ・スタッフのための専門的能力開発の時間数
- ・オリエンテーションと準備活動を終了した参加者の割合
- ・メンタリングの組み合わせ数、ないしはグループの数
- ・青少年一人当たりのメンタリングないしはプログラムに参加した時間数
- ・カリキュラム活動が完了した数ないしは割合
- ・青少年が主導ないしは支援したプログラムのオペレーション課題の割合
- ・その年に立てた少なくとも一つの目標を達成した青少年の割合
- ・目標を達成した全ての青少年の割合
- ・介護者が関与する行事の数
- ・プログラムに高い満足を示す青少年、介護者、市民ボランティアの割合
- ・評価活動の修了者数
- ・プログラムの全てのサイクルを修了した青少年の数と割合
- ・青少年の復帰割合（可能な場合）
- ・プログラムと接触を続けている修了者の割合

アウトプットは、単にそのままの数量か割合で表されるプログラムによってなされた活動である。プログラムの規模や履行上の忠誠度に関係するベースラインの数量設定の助けになる。批判的アプローチによるメンターの訓練が決定的に重要であるなら、メンターの訓練修了率は100%を目指すことが必要になる。

↓

<アウトカム>

【短期】

- ・青少年がスタッフやメンターと信頼できる関係性を築く
- ・青少年が気にかける目標や地域コミュニティの問題を明確化する
- ・青少年が付加的サービスや支援へのアクセスを手に入れる
- ・青少年が批判的対話に関与する

<ul style="list-style-type: none"> ・ 青少年が所属と自らの重要性の感覚を持つ
<p>【中期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 批判的意識と批判的動機の成長発達 ・ 批判的行動への関与 ・ 青少年の目標達成に向けた進歩向上 ・ (プログラムを介した) 友人関係の向上 ・ 大人の支援に関する認識の向上 ・ 人種的・交差的アイデンティティの向上 ・ ステレオタイプに対する恐怖の軽減 ・ 満ち溢れる希望と自己効力感の向上 ・ トラウマからの癒し
<p>【長期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 強度な批判意識と積極的なアイデンティティ ・ 青少年の行動の結果として地域コミュニティの問題が改善すること ・ 大人へ成功裡に移行転換すること
<p>アウトカムを考える場合、直接的に長期的な大きな絵のアウトカムのみを考えてはいけない。批判的意識を築き青少年と共に解放活動を行うことは時間を経て実現する。青少年とメンターを一緒に連れてくるというより差し迫った当面のアウトカム（例えば、信頼の構築や共通基盤の発見）を考え、それから時間と共に増大するその活動の利得を明確化すること。青少年がプログラムを修了した際に何を不得てほしいのか、これらの利得が大人に向けて成長していく長期間に彼らに何をなすのか考えること。</p>

4. 批判的メンタリングによる従来のメンタリングへの批判とプログラム評価

上記の批判的メンタリングのロジック・モデルは、従来の青少年向けメンタリング運動やメンタリング・プログラムが前提としてきた世界観や価値観への挑戦を反映したものである。これらは、従来のメンタリング運動の限界と根本的問題に関する指摘を含んでいる。

MENTOR はこれらを「愛すべき批判」として捉え、以下のように核心的問題提起を概括している。①青少年を「問題」としてとらえることは妥当なのか。青少年を社会の「排水管」(drain)として概念化し、青少年の奮闘を個人的欠陥によるものとして構造的抑圧ととらえていないことは正しいのか。②裕福な白人の成人を救世主のように見なすことは正しいのか。裕福な大人のメンターが周辺化された青少年に何が与えられるかが強調され、これらのメンターがまず周辺化を予防するために何ができるのかは強調されていないのではないのか。③優れた基準 (golden standard) に従うプログラムの類型に限定するのが正しいのか。大規模で豊かな資源を持つ厳正な評価方法に耐えるプログラムはますます繁栄する一方、多くの革新的な草の根の努力が財源獲得機会から排除されている。④問題の根本的原因の検討を避け、メンタリングをより困難な政策や制度レベルの選択に代わる安易な「解決」として提供しているのではない

か。例えば、メンタリングはもしほかの構造的制限が取り除かれれば違いを生み出すことができるということを認めるのではなく、メンタリングがいかに単独で経済的上昇移動を促進しているのかを検討することは妥当なのか。⑤しばしば同じ抑圧的制度に支援されていてよいのか。メンタリング・プログラムや研究を支援している企業の有色人種に対する賃金不払い等をどう考えればいいのか¹⁹。

批判的メンタリングが特に留意しているのが、従来とは異なるプログラム評価の在り方である。The Center for Critical Mentoring and Youth Work が強調しているプログラム評価は、以下の五つの柱を打ち立てている。

- ・ 空気を清浄化し、水を純化する行為：（メンタリング・プログラムはいかに青少年をより批判的にしているか。プログラムは青少年の多様性を考慮しているか。伝統的な様式はどのようなもので、それが青少年にとって快適かどうか。人種について開かれた会話をしているか。そうでない場合、いかにしたら我々の文化の一部である人種に関する開かれた議論を行うことができるのか。）²⁰

- ・ 青少年中心主義：（プログラムの使命は青少年中心となっているか。使命の実行に青少年をいかに含めているか。青少年を包摂するために再想像し再構築するどのような過程を設定したのか。あるいは新たなプログラムにそれらをどのように設定するのか。プログラムの目標は青少年に沿って考案されているか。Youth Participatory Action Research がプログラムのデザイン化や再デザイン化、導入にいかん活用されているか。組織の各段階において青少年はどのような役割を果たしているのか。研修や組織行事、組織の日々の実務の扱いにおいて、青少年はいかに包摂されることが可能なのか。彼らはいかに参加するのか。彼らを包摂するためにあなたはいかに彼ら呼び入れるのか。）²¹

- ・ 文化的関連性：（当該組織は地域コミュニティにおいていかに位置づけられるようになるのか。サービスを提供したいと考えている地域コミュニティのメンバーはプログラムをどのように見ているのか。プログラムはその使命や目標について意思疎通する様式がいかに負債に根差した概念ではなく文化的豊穡に焦点を当てていることを確保しているのか。プログラムはいかに地域コミュニティのメンバーを惹きつける様式で募集活動を行うことができるのか。プログラムはスタッフやボランティア、メンターが文化的に関連した実践に従事することを確保できるのか。地域コミュニティの必要にプログラムは耳を傾けているか。我々は我々にとって大切な問題あるいは我々の地域コミュニティにとって大切な問題に焦点化しているか。）²²

- ・ 性的マイノリティ向けメンタリングの交差性：（性的マイノリティの青少年とよりよく活動するためにいかにメンターを訓練しているのか。青少年と交差性に関する会話を行っているか、あるいはその計画はあるのか。我々がいかに性的マイノリティの青少年の声を包摂することを確保し、そのプライバシーと確定過程を尊重しているのか。青少年を支援する活動にあつて我々は我々のジェンダーやセクシュアリティの概念に挑戦しているか。我々が行っている活動に性的マイノリティのコミュニティを包摂するよう働きかけてきたか。性的マイノリティの青少年が自らのアイデンティティを快適と思わないかもしれないボランティアやスタッフと接

触しないことが確保できる構造になっているか。いかに交差性の概念をよりよく理解できるか。交差性は我々が共に活動する青少年や地域コミュニティに影響を与えているか²³。

・地域コミュニティを中心とする文化的に関連したデータの収集：(データ収集の現在の過程はどのようになっているのか。現在の過程は、青少年と彼らが住んでいる地域コミュニティを包摂しているか。これらの過程は我々の非営利の物語をよりよく伝えるのを支援しているか。我々が行っている仕事を評価し、地域コミュニティが包摂される評価のための過程をもっているのか。単に資金提供者だけでなく、我々の仕事を地域コミュニティと意思疎通する戦略をもっているか。これらのツールを批判的メンタリングの活動の結果を捉えるためにいかに活用することができるか²⁴。

上記は従来の青少年向けメンタリング・プログラムのプログラム評価とは大きく異なる。プログラム評価においても青少年がその運営に参画する青少年中心主義を貫き、自らを地域コミュニティに位置づけながら、交差性等個々の参加者の多様性を尊重している点が特筆される。

5. おわりに

以上、2010年代後半以降の批判的メンタリングの動向について、研究と実践の往還の視点から検討してきた。ここで明らかになったのは、米国の青少年向けメンタリング運動が、欠損モデルの克服や青少年中心主義の徹底、交差性を重視する文化的多様性の尊重等の批判的メンタリングの主張を取り入れ、よきメンターとなるための研修やプログラム評価を改訂することで新たな進化を遂げつつあることである。MENTORは、今後のメンタリング運動の課題について、以下のように述べている。「批判意識の構築によって、個人的に奮闘し地域コミュニティも強化する自信に満ちた強い青少年が形成されている。これこそが我々がなさねばならない仕事であり、メンタリングのサービスを個人の領域から制度的な抑圧の問題を提起することに移行させる必要不可欠な側面である。」²⁵

批判意識の構築・発展は青少年の健康に良き影響をもたらし、学業やキャリア発達とも緊密に関連している。青少年の批判意識はメンタリングによって育まれている。批判意識がもたらす積極的成果以上に重要であると思われるのは、その長期的な効果としての積極的な(人種的)アイデンティティの確立であり、批判意識は自らの所属集団に関する支配的な間違っった語りを撃退する「心理学的鎧」となっている。

2020年代の今日、米国の青少年向けメンタリング運動は批判的メンタリングを組み入れることによって、人種やジェンダー、セクシュアリティ等の個人と集団に負荷された権力関係に正面から対峙し、その不当性に異議を申し立てる社会運動に転化しつつある。そうしたメンタリング運動の進化を支えているのが、メンタリング運動に参加する個人の積極的な学びとプログラムの実践を支える研究の基盤であることはいままでもない。

1 拙稿「批判的メンタリングに関する序論的考察」『愛知淑徳大学論集－教育学研究科篇』10、2020年。

2 例えば、Lyons, M. and McQuillin, S., Mentoring for Enhancing Educational Attitudes, Beliefs, and Behaviors, *National Mentoring Resource Center Research Review*, March 2021.

3 Weiston-Serdan, T., *Building Critical Consciousness and Youth Activism*, MENTOR, 2022, p 99.

4 Weiston-Serdan, T. *Critical Mentoring*, Stylus, 2017.

5 Weiston-Serdan, 2022, op. cit.

6 Hart, M., *Promoting Critical Consciousness: The Role of Positive Youth Developing Programming*, 2020, (Master's thesis, University of South Carolina) (<http://scholarscommons.sc.edu/edt/6002>)

7 MENTOR, *What does Research Tell us About Mentoring & Building Youths' Critical Consciousness? Critical Mentoring Supplement to the Elements of Effective Practice for Mentoring*, 2022.

(<https://www.mentoring.org/wp-content/uploads/2022/07/2-Critical-Mentoring-What-Does-Research-Tell-Us-About-Mentoring.pdf>)

8 Ibid.

9 Ibid.

10 Ibid.

11 Ibid.

12 Heberle, A. et.al., Critical Consciousness in Children and Adolescents: A Systematic Review, Critical Assessment, and Recommendation for Future Research, *Psychological Bulletin*, 146(6), April, 2020.

13 Ibid. MENTOR, 2022, op. cit.

14 MENTOR, 2022, op. cit.

15 Ibid.

16 Monjaras-Gaytan, L. & Sanchez, B., How Mentors Support Young Adults as They Gain Awareness of Societal Inequality and Engage in Social Action, *The Chronicle of Evidence-based Mentoring*, June 1, 2022.

17 MENTOR, 2022, op. cit.

18 MENTOR, Generic Logic Model for Implementation of a Critical Mentoring Program, (<https://www.mentoring.org/wp-content/uploads/2022/07/4-Critical-Mentoring-Logic-Model.pdf>)

19 MENTOR, A (Loving) Critique of Mentoring Research, *Critical Mentoring Supplement to the Elements of Effective Practice for Mentoring*, 2022.

(<https://www.mentoring.org/wp-content/uploads/2022/07/1-A-Loving-Critique-of-Critical-Mentoring.pdf>)

20 The Center for Critical Mentoring and Youth Work, *Critical Mentoring Assessment Guide* (<https://docs.google.com/document/d/1rHtQgCqPELW8fhJVIT-xFsRSA34hZFsKu7iUhUOgWE/edit>)

21 Ibid.

22 Ibid.

23 Ibid.

24 Ibid.

25 MENTOR, *What does Research Tell us About Mentoring & Building Youths' Critical Consciousness?*, op.cit.

(本研究は JSPS 科研費 18K02294 の成果の一部である)